

一本の花火燃え尽きたるまでをかすか照らされ家族の時間 大口玲子

花火は打ち上げ花火などではなく、線香花火等の手花火と読める。手花火の小さな光の輪に照らされる家族。野原で太陽に照らされる家族とはまったくちがう、家族だけがやわらかく小さな光につつまれるような感覚。

ブランドカーテン下ろすオンライン会議にうつる顔を確かめ 服部 崇

オンライン会議に入室する直前の無意識の動作と読んていい。外出前に玄関の鏡を無意識に見るように、なんとなく顔を確かめたのだ。俳優ではないからことさら顔がクローズアップされるわけではないにもかかわらず、顔を確かめてしまう不思議。

時計屋は今日は休みだおそらくは時間を全て金庫にしまい 武藤義哉

街の時計屋が、機械としての時計をあつかいながら、じつは時間の管理にも関与しているらしいことをうたう今月の五首。なかなかのアイデアである。長生きするには、相応の金額をはらって時計屋に時間を売ってもらわなければならないらしい。

かまきりの子どもがひとり遊びしてオクラの花に風を渡る 児島昌恵

ごく小さな対象をうたう歌を、最近はあまり見ないような気がする。かつては長塚節の「馬追虫の髭のそよるに來る秋はまなこを閉ぢて想ひ見るべし」のごとき手本があったが、今はあまり見かけないし、話題にもならな

短歌の現在

No.487 今月の14首を読む

佐佐木幸綱

い。二〇〇〇年代に出た河出書房『日本文学全集・近代詩歌』等のアンソロジーから長塚節は消えてしまった。カマキリの子どもをクローズアップするこの歌を、なつかしいように思うのは私だけではないだろう。

スマホから送られてくる八月のオランダの空オランダの雲 久松宏二

作者の息子さんはアムステルダムで勉強しているらしい。両親が羽田空港へ見送りに行った歌の後に、この作がおかれている。下句のおおらかな感じが、なかなかいい（「心の花」今月号から息子・久松悠人君のアムステルダムでの短歌が載っている。数日前に原稿段階で読んだ）。

思えば、私がオランダに一年ほどいた一九九〇年代初頭は、国際電話の時代だった。まだメールもスマホもなかったのを思い出す。この三十年にオランダもずいぶん近くなったなあ、と感慨をおぼえている。

鮎雑炊に浮かび来るなり遠い日の郡上の美しき濃紺の闇 細溝洋子

下句「……郡上の美しき濃紺の闇」がいい。都市には絶対のない郡上の闇を思い出す。「鮎雑炊」は郡上で開催された「心の花全国大会」の思い出の料理。私もよくおぼえている。二〇〇五年八月の全国大会だから、もう十六年も昔のことになる。郡上大和は長良川の上流だから見事な天然鮎がとれる。木島泉さんをはじめとする郡上歌会メンバーの心づくしで、他では食べられない豪華